idea

ニュースレター「イデア」

2025. 2

NPO・地域・企業・行政の情報発信により、
「アイデア」と「であい」の機会を創ります。

1｜二言三言｜　フォトグラファー 遠藤凌平さん（前編）
3｜団体紹介｜　一関まちづくりの会
5｜地域紹介｜　大木自治会（東山）
7｜企業紹介｜　くまがい接骨院（千厩）
8｜博識杜のフクロウ博士｜　地域運営の落とし穴55　地域コミュニティは、消滅する？
9｜センターの自由研究｜　仕事の流儀ファイル№6「馬喰」

今月の表紙

祈雨や止雨のため生きた馬を献上し、神々の乗り物として奉納されたと云われる「神馬」。一関市厳美町本寺地区の「駒形根神社」には、黒く彩色された神馬の像があり、地元では馬の神様(通称：オシンメサマ、オズメサマ)として信仰されています。古来より「馬」は人々の生活と深い繋がりを持ち、大きな役割を果たしてきました(自由研究)。

idea
発行　いちのせき市民活動センター　せんまやサテライト
〒021-0881　一関市大町4-29 なのはなプラザ4F　Tel 0191-26-6400　Fax 0191-26-6415
〒029-0803　一関市千厩町千厩字町149　Tel 0191-48-3735　Fax 0191-48-3736
ホームページ：https://www.center-i.org/　メール：center-i@tempo.ocn.ne.jp

おしらせ

情報　「一関まちづくりの会」Instagram更新中！

本誌「団体紹介」で紹介した「一関まちづくりの会」はInstagramを活用し、イベント出演の様子や一関市内のスポット紹介などを発信しています。詳しくは二次元コードを読み込むか下記まで。

ユーザーネーム：@itp_20220501
※Instagram内で「一関まちづくりの会」で検索しても上位に出てきます。
問合：Instagram(@itp_20220501)からお問合せください

イベント　第11回 そげいのひなまつり

大東町曽慶の「手まりの会」が主催する「そげいのひなまつり」は、今年で第11回目を迎えます。一針一針想いを込めて縫い上げた吊るし雛飾りや干支のぬいぐるみなど100点以上を展示するほか、手作り小物の販売も行います。期間中、結いネットそげいとの協賛事業として、地域づくり講演会も開催します。詳しくは下記まで。

開催日：2025年
2月28日(金)～3月3日(月)
時間：9時～15時
場所：大東曽慶地区センター
（大東町曽慶神蔭32-1）
問合：0191-75-2244
（一関市曽慶市民センター）
≪地域づくり講演会≫
日時：3月1日(土) 14時～
講師：東北弁落語家 六華亭遊花氏

情報　藤沢・長徳寺 令和7年度蘇民祭のお知らせ

「岩手の蘇民祭」の1つ、「長徳寺蘇民祭」を下記日程で開催します。昨年同様、柴燈木登り及び袋ねじりを行い、今年は改修工事を終えた不動堂の落成式と新築祈願及び本堂でのつるし飾り展示も行います。詳しくは下記まで。

開催日時：2025年3月2日(日)
〈不動堂祈願〉10時(受付開始は8時～)
※事前予約は不要
〈つるし飾り展示〉8時～12時
料金：参拝料無料
場所：時宗 不退山 長徳寺
（藤沢町保呂羽字宇和田18）
問合：0191-63-3988
（長徳寺蘇民祭保存協力会）

募集　教育旅行等の「民泊」受入れ家庭募集！

地域資源を活かした、教育旅行及び着地化型観光による交流人口の拡大等に取り組む「(一社)いちのせきニューツーリズム」では、修学旅行や体験学習などで他県から訪れる子どもたち(中学生・高校生)の「民泊」受入れに協力してくれる家庭(体験要素があれば農家でなくても可)を募集しています。詳しくは下記まで。

受入人数：3名程度/1泊が基本
体験：各家庭で、農作業や家の作業等を手伝って過ごします。
謝礼：宿泊体験にかかる体験料(食事費用含む)を支払います。
問合：0191-82-3111
(一般社団法人いちのせきニューツーリズム)

情報　いちのせき市民活動センター LINEアカウントのご案内

いちのせき市民活動センターが行う講座やイベント情報などを、コミュニケーションアプリ「LINE」で随時配信しています。下記二次元コードを読み取ると、友だち登録画面が表示されます。どなたでもお気軽にご登録いただけます。※登録・利用料は無料です。

問合：0191-26-6400
（いちのせき市民活動センター）
HP：https://www.center-i.org/
※講座やイベントの情報はホームページからもご覧いただけます。

情報　いちのせき市民活動センター オリジナル「LINEスタンプ」

いちのせき市民活動センターでは、コミュニケーションアプリ「LINE」の「トーク」機能内で使用できるオリジナルスタンプを販売中です(全2種)。LINE内のスタンプショップまたはLINE STOREから購入可能です。二次元コードまたはURLから販売サイトへアクセスできます。詳しくは下記まで。

URL：https://store.line.me/home/ja
※「LINE STORE」内で「里山自治会の仲間たち」で検索すると表示されます。
問合：0191-26-6400
（いちのせき市民活動センター）

まちの写真展

スタッフがまちの１コマを切り取ります。

作品名「茅を刈る」

11月下旬の茅刈の様子。2024年7月～8月発行の本誌「自由研究『茅葺屋根の葺き替え』」でお世話になった職人に声をかけていただき、作業現場にお邪魔しました。茅葺の葺き替えが難しい昨今、茅刈などのお手伝いを募集しているそうです。詳しくは当センターへ。

旧町村別の人口動態等を共有します。

2025年１月１日付
(2024年12月31日現在
住民基本台帳より)
※外国人登録者含む

一関市全体		前月比
人口	105510	-207
世帯数	46287	-33
出生数	20	-11

	人口	前月比	世帯数	前月比
一関	53221	-69	24611	-20
花泉	11567	-22	4664	6
川崎	3134	-13	1257	-4
千厩	9483	-8	4078	-3
大東	11374	-35	4821	-9
東山	5655	-24	2262	-1
室根	4230	-5	1806	-2
藤沢	6846	-31	2788	0

183 /105,510

遠藤 凌平

一関学院高等学校から東京農業大学へ進学。卒業後は秋田県内の企業へ就職し、フィリピンへの語学留学を経て、令和２年に地元へＵターン。フリーランスのフォトグラファーとして地元で活動しながら、写真教室や情報発信ツールの講師依頼にも対応している。一関市室根町出身・在住。

一関市立東山小学校の授業にて講師を務め、遠藤さんにとっての「伝統芸能とは？写真とは何か？」を話しました（令和４年12月）。

第126回　フォトグラファー 遠藤凌平　×　いちのせき市民活動センター センター長 小野寺浩樹

「地域らしさ」を伝えて残す
～ 地元を出て気づいた「危機感」【前編】 ～

一般的に「フォトグラファー」とは、広告写真や報道写真、記念写真など、様々な分野の写真を撮る職業を指します。市内で写真撮影を生業とする企業や個人が多い中でも、各地の写真教室で講師を務めるなど露出があり、地域から特に親しまれているフォトグラファーの遠藤さん。活動を始めた背景を聞いていくと、海外を通して気づいた地元への強い想いがありました（2回シリーズの前編）。

小野寺　フォトグラファーの仕事だけでなく、市内や県外で写真教室の講師としても活動されていますよね。昨年担当した講座や、講師を始めたきっかけを聞かせてください。

遠藤　昨年は、一関市立藤沢図書館の「かんたん★ワクワクインスタ講座」※1、一関市室根市民センター主催の「初心者カメラ教室」※2「スマホカメラ教室」※3、ＪＲ東日本大人の休日倶楽部が主催する「スマホで楽しむ写真の世界講座」の講師を担当しました。令和４年、企画展を開催していたとき、室根市民センターの職員さんが観に来てくださって「写真教室の講師をやってみませんか？」とお誘いくださったことがきっかけですね。フォトグラファーとしては、令和３年に「町をあるく ＨＩＧＡＳＨＩＹＡＭＡ ＭＡＰ」の写真撮影を担当（一部を除く）したことが最初の仕事ですね。

小野寺　市内で「フォトグラファー」という肩書をあまり見かけませんが、具体的にどのような仕事でしょうか？

遠藤　肩書は何でも良かったのですが、写真を通して伝える全ての役割を担いたいという想いから「フォトグラファー」としています。お客様には「写真だけが必要な方」と、「写真をどうやって外に発信していくかまでを求めている方」がいます。自分は地元で活動していることもあって、地元の力になりたい気持ちが強く、写真を使うところまでサポートできるよう、デザインやホームページ制作、広報戦略のアドバイスなどもお手伝いしています。様々なタイプのフォトグラファーがいますが、この姿勢は珍しいかもしれません。

小野寺　ほかの写真屋さんとは違った視点で地域を支えているんですね。ところで、フォトグラファーとして活動を始めたのは、つい最近だとか……？

※1　Instagramのアカウント開設から基本的な操作方法や投稿のコツ、写真を撮る際のコツを学べる講座（令和６年２月18日に開催）
※2　一眼レフカメラやミラーレスカメラの基本的な使い方のほか、撮影技術を学べる講座（令和６年９月14日（計２回）、９月27日、10月３日に開催）。
※3　スマートフォンのカメラで撮影する際の設定方法やコツを学べる講座（令和６年10月１日開催）。

遠藤　はい、数年前までカメラの使い方も分からなかったド素人なんです。地元での活動1年目くらいは、スマホカメラで市内の色んなものを撮り、記事を書いてネット上に発信していました。何も手に職をつけないまま仕事を辞めて、勝手に地元に帰ってきて、勝手に活動を始めた感じです。写真についてのノウハウは宮城県気仙沼市在住のプロに教えてもらい、その他は独学で、現在の活動に繋がっています。

小野寺　写真家というよりも新聞記者の発信方法に似ていますね。地元を出てから現在まで、どのような経緯が？

遠藤　高校から大学は駅伝一筋で、一関外へ出ていた期間は約8年くらいです。高校までは地元との繋がりが薄かったのですが、大学で都会に出て競争の世界に晒される中、諸々を振り払って「ホッと休める場所」が地元だと痛感しました。高校は高校駅伝、大学は箱根駅伝を目指していましたが、いざ終わったら目標がなくなり、宙ぶらりんの状態で。地元に近いところで就職先を探し、自分にとっては未知の秋田県で就職しました。そして、漫然と過ごしていたあるとき、同級生が亡くなったんです。身近な人の訃報が悲しかったのと同時に、「明日って当たり前に来るわけじゃないんだ」とショックも受けました。自分はきっと今死んだら後悔すると感じ、就職して3年目、外の世界を見てみようとフィリピンへ旅行しました。

小野寺　その後、フィリピンへ留学もしたと聞いていますが、旅行で何かを掴んだのでしょうか？

遠藤　そうですね。フィリピンに対して一般的な開発途上国のイメージを持っていたのですが、実際は東京と同じくらい盛んな場所もあって、それを見ていたら、ふと「日本の東北はこのまま持つのだろうか？」と危機感を覚えました。「人口減少が進む地元のために何かしたい」「東北ってまだまだ良さが知られていないな」などと考え始め……。だらだらするより1回挑戦してみたいと思い、英語やホームページ制作の勉強など下準備に1年費やし、次の年に仕事を辞めて留学しました。

小野寺　留学してそのまま残らなかったんですね。

遠藤　実は、インターン先も決まっていたのですが、一旦帰国したタイミングが令和2年2月で、翌月、コロナ禍に突入し戻れなくなりました。次の動きを検討していたとき、向こうの人たちとの会話で、岩手県や地元の成り立ちを聞かれても全然答えられなかったことを思い出して。ちゃんと自分の目と足で地元を見てまわりたいと思い立ち、取材して歩くようになりました。

小野寺　もともと地元の現状に危機感を覚えていたので、情報発信もしていった、と。発信だけでなく、記録としても残りますね。

遠藤　はい。「まちが終わる」のはもうちょっと先だと思うのですが、「この地域をつくっている根本が崩れてなくなっていく」のは、もう始まっていて。その地域のアイデンティティがなくなると、その地域である意味がなくなり、「ここじゃなくていい」という風になっていく。だから、記録して伝えていかなくちゃいけない。

小野寺　そこが日本と海外の違いだと感じています。海外の人は築50年の趣あるアパートに住みたいと言う人が未だにいると聞いたことがあるので、「古いものは大事に残す」という思いが強いのではないかと。

遠藤　フィリピン人はフィリピン人であるというアイデンティティを持っていました。日本人に置き換えたときに、それを持っている人は少ないのではないかと思ったんですよね。日本が評価される部分はちゃんとあるはずなのに、それを日本人が気づいてないのがもったいないなって。

小野寺　日本は高度経済成長期に、古いものは壊して新しいものをつくるという感覚が根付き、地域らしさを失っていったかもしれません。

遠藤　大きく資本が動く部分は、みんな同じ型になっていきます。では、どう差別化していくのか？それは、例えば「室根人らしさ」をつくっているものが、「価値」を生み出せるんじゃないかと考えていて、それらを発信し残す活動をしています。

【後編に続く】

団体紹介

合言葉は「合唱のまち・一関」

一関まちづくりの会

一関まちづくりの会
「『合唱のまち・一関』を後世に残したい」という思いから令和４年５月発足。現在の会員は５名(10代～20代)。一関市内で開催される音楽イベントへの出演・スタッフ協力ほか、SNSを活用した情報発信にも力を入れている。

※お問い合わせは同会が運営しているInstagramアカウント「一関まちづくりの会(@itp_20220501)」へ

写真：ミーティング時の集合写真(令和６年12月)

「合唱」から生まれた目標と仲間たち

同会の名称は、一見すると「まちづくりを推進する団体」と想像しますが、取材を通して定かとなったのは「合唱のまち・一関」を主軸とした活動でした。

一関市が「合唱のまち・一関」と呼ばれるようになったのは、昭和49年、年の瀬を歌声で彩る「いちのせき第九演奏会」が開催され、合唱団員を市民に募集したところ３００人が参加。その後、市内に多くの合唱団が結成されたことがきっかけだと言われています。

「僕自身、歌うことが好きで、中学と高校は合唱部でした」と話すのは、一関まちづくりの会の事務長を務める千葉龍我さんです。千葉さんは、中学・高校と合唱にのめり込み合唱の楽しさを体感。その経験を忘れることなく、高校卒業後は介護職の傍ら、一関市を拠点に活動している混声合唱団の「一関市民合唱団」[※1]にも所属(当時)。「東日本合唱祭」をはじめとした大会でハーモニーを奏でていたほか、母校である一関修紅高等学校の音楽部にOBとして関わるなど、千葉さんの人生にとって音楽(合唱)はかけがえのない存在でした。そんな中で「好きな音楽でまちづくりをしたい。『合唱のまち・一関』を後世に絶やさず残したい」という目標が芽生え、同会発足へと動き出します。「高校のときに同じ部活だった同級生が地元に残っていたので声をかけると、快く賛同してくれた」と当時を振り返り、千葉さんを含めた３人で発足に向けた準備を重ね、令和４年５月に同会が誕生しました。

※1　平成2年8月に行政、市内の合唱団、まちづくり団体などで実行委員会を組織して第1回を開催。東日本各地及び全国で活躍している優れた合唱団が一同に会し、共に歌い、共に鑑賞し、音楽の創造をめざす祭典。令和6年10月に第31回を開催した。

活動を始めて感じたギャップ

発足当初は、自主イベントの企画や、使われていないピアノを引き取ってストリートピアノを設置するなどの構想を考えていたそうですが、メンバー全員が会社勤めであることや、資金集めと整備に時間を要するなど、思うような活動ができなかったと言います。そこで、「まずは自分たちの存在を知ってもらい、無理のない活動をしていこう」と考え、既存の音楽イベントへの参加や運営協力などの活動へ移行。第31回東日本合唱祭では、実行委員会に所属し、プログラム内にある「合同合唱」[※2]の練習へ参加できない方や開催当日の誘客促進等を目的に、合同練習を撮影して動画共有サービスＹｏｕＴｕｂｅへ配信しました。「ＹｏｕＴｕｂｅを活用するのは、練習の様子を共有する意味もありますが、ホール内の声の響きを確認する意味もあります」と、若手ならではの強みでイベントをサポート。さらに、千葉さんが高校生のときから関わっている「時の音ＦＥＳＴＩＶＡＬ」[※3]へのステージ出演や縁日での出店など、様々な音楽イベントに参加することで団体をＰＲしてきました。

一方で、現在の会員全員が西磐井在住ということから、東磐井の情報が入手しづらいという悩みも。自分たちの力で情報収集して「千厩夜市」などに出演できた経験はありますが、すでに申込を締め切っていたり、イベントが終了していたり……新鮮な情報を集めることが難しい点に課題を感じているそう。千葉さんは、「これからも音楽関係のイベント出演や運営のお手伝いなどを積極的に行い、つながりをつくっていきたい」と今後について語り、「ゆくゆくは広域にメンバーを増やし、一関全体をカバーできればと考えている」と続けます。

※2　招聘団体と一般参加者、約３００名による大合唱
※3　一関市の音楽愛好者で組織する「時の音プロジェクト」によるイベント

今は微力でも未来のために

同会では、ＳＮＳを活用し、自分たちが出演するイベントのほか、市内の観光スポットなどの情報発信にも力を入れています。「一見、合唱をしたいのか、観光スポットをＰＲしたいのか、活動が定まっていないようにも捉えられますが、『合唱のまち・一関』を残すためには『一関』というまちを残さなければならない。そのために、一関の良いところをたくさんの人に知ってもらおうという思いから情報発信に取り組んでいます。ひとつの楽曲を同じ時間と空間の中で共有することで生まれる不思議な一体感が、合唱の魅力です」と千葉さんは語ります。

生まれたての団体で紆余曲折はありますが、これからも音楽の力を響かせ、「生まれ育った故郷」の「まちづくり」に励み続けます。

Q.あなたにとって「合唱」とは？

会長

A. つながり

吉田（よしだ） 捺（なつ）さん
生まれも育ちも一関。発足当初は事務長を担い、令和６年から会長を務める。十八番は「Let It Go(松たか子ver.)」です。

事務長

A. 必要不可欠！

千葉（ちば） 龍我（りゅうが）さん
生まれも育ちも一関。発足当初は会長を務め、令和６年から事務長として会長をサポート。十八番は「貴方の恋人になりたいのです(阿部真央)」です。

- Photo gallery -

老若男女を魅了する
合唱だけでなく、イベントによってはソロで歌うことも。J-POPやアニメソングなど、レパートリーは多岐にわたります。

空間全てを楽しませる
時の音ＦＥＳＴＩＶＡＬでは、「スーパーボールすくい」や「くじ引き」を設け、音楽以外でも観客を楽しませました。

憧れのイベントに
東日本合唱祭の練習風景をＹｏｕＴｕｂｅに配信する大役を任せられ、緊張しつつも喜びのほうが大きかったとか。

団体の活動をＰＲ
インスタグラムやフェイスブック、Ｘ等のツールを活用し、情報発信に努めています。ぜひフォローをお願いします！

地域紹介

先人たちから受け継ぐ想い

東山　大木自治会

大木自治会（長坂）

東山町長坂地区の南東、東山町松川地区の東に位置する自治会。49世帯、113人が暮らす。６班体制で、総務、産業、厚生、社会、女性、文化の６部体制で運営。行政区は長坂10区。

左の写真：「ゆみおり館」前で農作業安全指導（令和６年）

集落で繋いだ「思い出の場所」

弓折山の麓に存在し、大木沢、大面、大持、木戸割、上沢田（一部）、木和田堀（一部）の６つの小字で構成される大木自治会。同自治会の拠点である「東山大木多目的集会施設（通称『ゆみおり館』）」が位置する場所は、昭和43年まで開校していた「東山町立長坂小学校大木分校」でした。かつては地元の子どもたちが通い、多いときは自治会内で６つのチームを編成して運動会ができるほど、子どもたちの声が響き渡る地域でした。

大木分校は、当時の分校には珍しく体育館が隣接していましたが、大木分校が長坂小学校に統合される際、分校の校舎を壊し現在のゆみおり館に建て直す流れに。「同じタイミングで体育館も取り壊す話も出たのですが、集落内に住む人たちがお金を出し合って建てた施設で、みんなの財産だったので、残していくことにしました」と、自治会長の鈴木欽勝さんと副自治会長の鈴木時男さんは語ります。

同自治会では、毎月第１土曜日に役員会を行っていますが、集落内の各団体の役も兼務する自治会役員が多いため、自治会事業の報告に限らず集落内の情報共有も同時に行われます。欽勝さんは、「役が多くて大変という思いよりも、各団体との予定のすり合わせがスムーズで良いと感じています。昔から結束力がある集落なので、何をするにも進めやすいです」と語ります。

コロナ禍のため、自治会行事を新しく展開させることが難しい時期が続きましたが、「花いっぱい運動」「自治会内の市道、棚田の草刈り」などは継続し、景観の維持と安全の向上に努めてきました。そんな中に再開した「大木夏祭り」は、ゆみおり館の駐車場と体育館を会場に開催し、帰省してきた人たちも多く参加。「みんなが小さい頃からある建物なので、変わらない様子に『懐かしい』と話してくれる人が多いです。来年は、さらに自治会行事を活発にしていきたいです」と意気込みます。

守り続ける「誇り」

同自治会があるエリアでは「行山流大木鹿踊り」という伝統芸能を継承しており、体育館はその練習所としても活用しています。町内で唯一の鹿踊りとなっており、現在は14人で活動中です。

約３００年前、明正天皇時代から歴史がある「行山流鹿踊り」は、文化７年に大原村（現在の大東町大原）の山口から集落に伝えられました。市内各地でも披露しつつ、過去には北海道や東京都などのイベントで披露したことも。

「これからの課題は、後継者不足で……」と語るのは、同自治会総務部長でもあり、大木鹿踊り保存会の会計を務める、鈴木正男さん。「会員の中には10代の学生が４人いますが、もし町外に就職するとなると、せっかくマスターしたとしても、引き継いでいくのは難しいと思います」と話す一方で、同集落出身で現在は山形県に居住するメンバー（30代）は、休日の合間を縫って練習やイベントに参加してくれているそうです。「彼は小学校のときからずっとやっているんです。これからもぜひ一緒にやっていきたいですね」と笑顔を見せます。

前向きな姿勢で取り組む

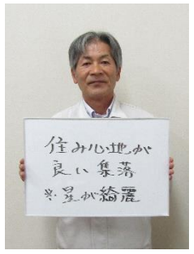
自治会長の欽勝さんは、大木子供会の会長を務めていたとき（平成18年頃）、ゆみおり館に子どもたちがお泊りするイベントを企画。その際、なかなか自治会や子供会行事等に参加できない保護者にも参加してもらおうと、ビアガーデンを同時開催しました。「子どもだけでなく大人も楽しめる、お互いに楽しい思い出にしたい」という思いがあっての企画でしたが、自治会長になって「自身が子どもの頃に経験していたことを今の子どもたちにも経験させてあげたい」という気持ちを持っているものの、少子化が進み、同集落内のみで親子レク等を企画できず、近隣の地域と連携して取り組んでいる状況です。

「どこも同じ悩みがあるとは思いますが、20年前とは違って今は50戸をきり、人口減少を感じているところです。あと20年後はきっと半分に減っていくだろうと思っています」と現実を見据えつつ、「今、一番活気があるのはグランドゴルフでしょうか（笑）たしかに人口減少は課題ですが、少ないながらも楽しくやっていければいい」と笑い合うみなさん。

山々と田んぼに囲まれ、６月にはホタルも飛ぶ、自然豊かな同集落。先人たちが築き上げてきた「集落の宝」をこれからも守り続けます。

Q.集落の自慢は何ですか？

自治会長



A. 住み心地が良い集落 ※星が綺麗

すずき　よしかつ
鈴木　欽勝さん

１期２年目。生まれてからずっと大木に住んでおり、「小さい頃は砂鉄川で素潜りしたり魚をとって遊んだ。それが楽しかった」と言います。

副自治会長

A. 協力的な自治会です

すずき　ときお
鈴木　時男さん

１期２年目。前期の会長が副会長を務める体制で、「周りの協力のおかげで自治会長をやり遂げられた」とのこと。東山町田河津地域出身で、趣味は滝巡り。

- Photo gallery -

かつての大木分校

建てられた当初、大木分校は茅葺屋根で、そのあと瓦屋根に移行し、「ゆみおり館」へと建て替えられました。

景観維持活動

多面的機能支払制度を利用し、６月中旬に花苗の植え付けを実施しました。老人クラブと作業場所を分担しています。

思い出を繋ぐ体育館

「行山流大木鹿踊り」のほか、「大木神楽」の継承活動でも、一番身近な練習施設として活用しています。

棚田の草刈り

毎年６月～７月頃は、同自治会があるエリアの棚田の草刈りに汗を流しています。約40人が２か所に分かれて実施。

今月のテーマ

地域運営の落とし穴 55

地域コミュニティは、消滅する？

地域の未来はどうなる？

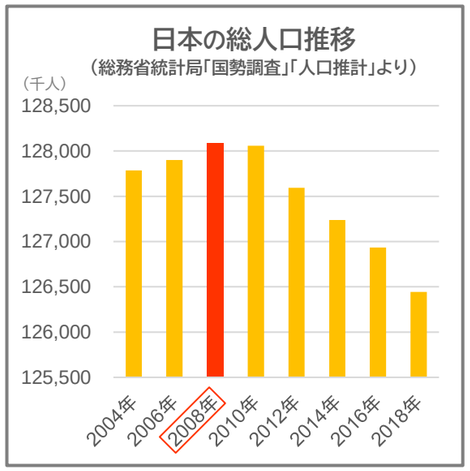
「消滅可能性都市」という衝撃的なニュースが出たのが、2014年(平成26年)のこと。この言葉は各地で波紋を呼び、市民レベルでの危機意識が高まったきっかけでもありましたが、良い結果をもたらしプラスに働いたばかりではなく、‘あきらめ感が出た’というマイナスの事実もあります。

「消滅可能性都市」とは、各自治体の20～39歳の女性人口が、2010年(平成22年)から2040年(令和22年)までの30年間で50%以下に減少する自治体のことを指し、全国で896自治体が該当するとされ、その中に一関市も含まれています。ニュースから10年が経過し、2024年の発表では、744自治体が該当しているとのこと。いくらか改善しているようですが、**一関市は10年前と変わらず、「消滅可能性都市」のままです。**

とは言え、ニュースというものは賞味期限が限られており、普段の何気ない会話からは消えてしまいましたが、一度覚えた情報はなかなか消えないものでもあり……。ある地域で子育て世代と雑談をしていたとき、「あと30年したらこの地域は消滅する」という一声が出てきました。私たちの地域は、本当に消滅するのでしょうか？不安な気持ちもあり、疑う気持ちもあり、でも、実際に周囲を見渡してみると……。答えは誰にもわかりません。

人の動きもあることなので、地域から人っ子一人いなくなるということは考えにくいものですが、テレビ番組「ポツンと〇〇」で紹介されるような、‘近所の人が存在しない家’が増えることも予想されます。そうすると、誰が、どうやって、その地域を支えていくのでしょうか？行政サービスにも、住民の支えあいにも限界があり、そうなるといよいよ「コンパクト化※1」が推進される可能性もあります。しかし、居住地域をコンパクト化することは、本当に可能なのでしょうか？これも、答えはわかりませんね。

‘暮らしの変化’と向き合う地域づくり



総務省統計局が発表した「統計が語る平成のあゆみ」によると、これまで増減を繰り返してきた日本の総人口は、2008年(平成20年)に１億2808万人のピークを迎え、2011年(平成23年)以降は減少し続けています。これはあくまで統計上で、都市に人が集中する時代から地方の人口減少は始まっており、私たちが肌感覚として人口減少を感じ始めたのは、それよりも前のことでしょう。

バブル崩壊後の1991年(平成３年)から2005年(平成17年)は就職氷河期となり、地方では就職先も限られたため、Ｕターン就職の人などが少なくなりました。私も氷河期世代でＵターン就職を希望していましたが、「就職先が無いから戻ってくるな」と言われた経験がありますし、同じ境遇の同級生たちも多かったのを記憶しています。当時は、‘生きていくために仕事に就くこと’を優先せざるを得ない状況で、それが人口減少の原因だとは言い切れませんが、少なからず要因にはなっているでしょう。社会情勢との因果関係は深いものですが、悲観的になっている場合ではありませんね。超高齢化時代のいま、そして、人口減少が進んでいく近い未来に対して、**‘日々の暮らしが変化していく事実’**に向き合わなければいけません。

AI(人口知能)などの新しいテクノロジーが次々と台頭しており、このまま20年が経過したら、全く違う社会ができあがっている可能性が高いです。「墓じまい※2」が当たり前になりつつあったり、本家分家などの風習や地域文化が薄れ始めたりしている現状を考えると……未来ではもっと希薄になっていくかもしれませんね。「我が家も自分の代で一区切りになるんじゃないか」と思うと、なんだか切なくなる未来です。

しかし、人がいる限りその精神や気持ちだけは継承され続けてほしいものです。**どんな状況であれ、人が住んでいれば、地域づくり活動は欠かせない**ので、頑張っていきましょう！

※1　経済協力開発機構(OECD)が2012年に発行した報告書『コンパクトシティ政策：世界５都市のケーススタディと国別比較』では、コンパクトシティの特徴を「高密度で近接した開発形態、公共交通機関でつながった市街地、地域のサービスや職場までの移動しやすさ」としており、このコンパクトな都市計画は「環境を守り、地域の経済成長を促進し、より良い質の生活を提供する」と述べている。
※2　墓石を撤去して墓所を更地にし、その使用権を墓地の管理者に返還すること。

企業紹介

千厩　くまがい接骨院

打撲や捻挫、骨折、脱臼などの外傷(以下、ケガ)等に対する施術などカラダ本来の機能改善をサポート。手技(徒手療法・整体施術)※1や超音波療法※2の他、急性期のケガや慢性的な症状を持つ方・原因が良くわからない方など様々な症状に効果が期待できるアキュスコープ※3を使用した最新治療も取り入れており、老若男女に関わらず、「ケガ」や「カラダの悩み」を解決できる環境づくりに努めている。

※1 電気治療器・注射・薬などを使わず手で直接患者さんのカラダに対して施術を行う。
※2 圧電効果による音波を発生し患部に微小マッサージ作用を与える。
※3 NASAの高性能レーダーを開発研究していた宇宙工学を応用して生み出された治療機器。

地域密着型の接骨院を目指す

一人ひとりに寄り添いサポート

令和6年12月で開業10年を迎えた「くまがい接骨院」。院長である熊谷克さんは、学生時代にサッカー部に所属し、練習によるケガや疲労による体の不調で悔しい思いをした自身の経験や、チームメンバーも同じ経験をしていたことを受けて、「将来はリハビリの職に就きたい」と考えるように。高校卒業後の進路を検討していく中で「柔道整復師」という資格があることを知り、千葉県内の大学へと進学しました。

大学では、柔道整復師の他、「教員免許(中学校と高等学校の体育)」の資格も取得し、関東の接骨院に就職。学生のスポーツによるケガや、日常生活でのケガを治療する中で、地元ではケガをしたときに接骨院に行く選択肢があまりないことに気づきます。

熊谷さんは、「接骨院(※＝整骨院)でも、骨折や脱臼などのケガ、捻挫や挫傷に対し、柔道整復師が施術を行うわけですが、カラダ本来の機能改善や、そもそもケガをしない身体の使い方など、一人ひとりに寄り添った形で、施術以外のサポートもすることができるんです」と解説。

主要な症状を緩和させる対症療法だけではなく、「根本的な原因が何かを究明することも大切」と続けます。

特に成長期の子どもは身長が大きく伸び、筋肉の柔軟性が低下して可動域が狭くなることで、一部の組織に負担がかかり、カラダの使い過ぎが原因となって、ケガや疲労につながるケースもあるのだとか。

「だからこそ、自身のカラダをよく知ってほしい。知ることで免れるリスクもある」という思いから、地元の治療の選択肢の一つとして「接骨院」を提供しつつ、セルフケア指導にも熱心に取り組んでいます。

地元に有益な施術を心がけて

地元に開業したきっかけは、平成23年の東日本大震災でした。「師匠(前職の院長)が29歳で開業したこともあって、自分もその年齢辺りを独立の目標としていました。そんな中での震災だったので、自分ができることで地元貢献がしたいという思いが増して、Ｕターンを決断しました。ご縁があって、ちょうど出身高校の近くで開業することができ、利用する方も10代の学生が多いですね」とのこと。治療について、「慢性的な腰痛などは保険適用外施術もあるため、病院※や整体院※をお勧めする場合もありますが、当院では日々研鑽し続けており、様々な治療も取り入れているため、まずは相談してほしい」と続けます。

ＪＦＡ((公財)日本サッカー協会)のサッカー指導者ライセンスも取得(令和5年)した熊谷さんは、「負担なくスポーツを楽しむカラダの使い方や、競技でケガをするリスクの減らし方などを教えていけたらと思っています。日常でのカラダの使い方も学んでもらえるような環境づくりもしたいです」と、これまでの経験と知識を最大限に活かした地元貢献を志しています。

※　資格や施術内容が違う。

1　院長で柔道整復師の熊谷克(すぐる)さん。
2　最新の治療機器アキュスコープを使用している様子。
3　院内は転倒防止対策もバッチリ。

DATA
〒029-0803
一関市千厩町千厩字石堂31-３
TEL　0191-48-5518
HP　http://www.9magai.com/

ミッション93

仕事の流儀ファイル No.6 「馬喰（ばくろう）」

農耕馬（牛）等の仲介を生業とする**「馬喰」**は、昭和後期頃まで各地域に存在し、当時の暮らしには欠かせなかった牛馬の様々な相談窓口にもなっており、人によっては獣医のような役割や装蹄なども担っていました。当地域においての役割が記録された文献やヒアリング調査の結果を整理し、実際に馬喰を職業としていた方にも取材しながら、牛馬のいる暮らしに想いを馳せてみました。

※記載内容はあくまでもセンター独自調査の結果です。

馬喰とは？

古来より牛と馬は、農耕や輸送、軍事など、どの時代においても人々の生活には欠かせない存在でした。そんな牛馬の売買を仲介していたのが**「馬喰（博労）」**。現代においては家畜商のことで、平安時代の貴族の乗り物「牛車」や、藩政時代（江戸時代）の各藩では、馬政に力を注いでいたとされ、「騎馬」などの牛や馬を取引していました。飼養技術の指導や、牛馬の爪を切ったり、歯ぐきから血を抜く「馬つくらい」をしたり、脚に灸をする等の病気治療を行うなど、**馬喰の役割は多岐にわたっていました。**

東北地方及び当地域においては平安時代から馬の生産や育成が各地で行われていたと言われています。一関市千厩町は、前九年の役の際、源義家が軍馬千頭を徴収し、戦線に繰り出したことが地名の由来と伝えられ、兵馬の補給地として全国に知られるようになったそうです。さらには源義経の愛馬「太夫黒」の出生地という逸話もあり、馬の存在が大きく確認できます。当地域では、江戸時代までは田畑を耕すのは人力が主で、牛馬を使うこともありました（牛を使った耕起が盛んだったのは西日本）。明治初期頃から**農業改良策の一つとして馬耕の技術を取り入れる**動きがあり、それをきっかけに耕地整理事業へと発展していきました。特にも西磐井郡が積極的に取り組み、犂（すき）の先進地であった北九州地方から「馬耕教師」の招聘、馬耕機の購入・展示・貸与、馬耕指導者の育成、講習会などを行っていたそうです。

「馬喰」と「伯楽」

鎌倉時代につくられた重要文化財の「馬医草紙絵巻（東京国立博物館所蔵）」には馬医道の守護神とされる和漢の肖像と共に、忌み日、本地、真言が記されているほか、馬の病を治すために用いられた薬草の着色絵図も描かれています。この守護神とされる中に、**「伯楽」**という名が出てきますが、伯楽とは中国春秋時代に、馬が良馬か否かを見分ける技術（力）があった人物とされ、現代においては「名伯楽」と言って「人物の素質を見抜いて能力を引き出し、育てるのが上手な人」という使われ方もしています。そんな「伯楽」という人物の名が転じて**「馬の良否を見分ける人＝伯楽」**となり、中国から日本に伝わってきたと言われています。江戸時代には幕府の中に「馬労（博労）」という役職があり、**伯楽→博労→馬労**と転じ、「馬喰」に由来するという説もあります。

馬と猿

▲藤沢町の馬小屋内で祀られていた猿の頭蓋骨

猿を馬や牛の守り神とする、**「厩猿（うまやざる）」**と呼ばれる信仰があり、厩（馬小屋）に猿の頭や手の骨を吊るして飾り、牛馬安全の祈願や魔除けとして祀っています。**陰陽五行説において水を司る猿は豊穣をもたらし、さらには火を司る馬を制御すると考えられ、馬や牛を守護してくれる存在だった**のです。厩猿には、皮や肉を目的として捕らえられた猿の骨が使用されたと言われています。現在では、ほぼ姿を消しており、東北地方を中心として全国各地の厩から発見される猿の頭や手の骨などに信仰の痕跡が残るのみとなっています。

馬喰を最初に始めたのは、猿回しを披露する「猿屋」という職業の人々という話も……。上述の‘猿は馬の守護神’というあやかりから、猿屋は厩にいる馬を祈祷してまわったとか。

当地域の「馬喰」の役割と変遷

右頁で述べたように、馬喰の担う役割は大きかったと言えます。それでは、現代において馬喰の役割はどうなったのでしょうか？全国的な動きと併せて、ヒアリング調査などから得た当地域の実情と照らし合わせながら深堀していきます。

昭和31年頃撮影
馬と共存する暮らし

	全国的な動き	当地域の実情
明治18年	**獣医免許規則 公布** この規則によって免許を得た者でなければ家畜診療業務を行えなくなった。	牛馬の健康状態、ケガの有無などを確認して取引の価格を決めていた馬喰は、「獣医免許規則」が公布される前までは治療に携わっていたとか!?
	 宮下公民館前「山目馬検場跡地」の碑	明治23年に「岩手県産馬事業山目組合」が発足するなど、馬の生産・育成を生業としている人々（≒馬喰）による馬商組合が各地で結成されていきます。さらに当時の山目村には、馬の改良や売買、軍馬の供給、二才駒のせり市場として「山目馬検場」が設置され、周辺には馬商人や馬を育てて売りに来た人が休憩する馬喰宿、馬車屋、蹄鉄屋等が建ち並び、地域産業の振興に寄与し、地元の人に親しまれていたそうです。※「山目馬検場」は昭和60年9月に解散。 明治初期から馬耕の技術を取り入れる動きがあり、牛よりも馬の飼育頭数が高いことが資料等から読み取れました。**牛の飼育頭数が高くなってきたのは、軍馬の需要が少なくなった第二次世界大戦以降です。**そのため、水田の耕起なども馬から牛へと変わっていきますが、耕地整理が進むにつれて、耕耘機での作業も多くなり、家畜を利用した耕作は少しずつ減っていきました。
昭和24年	**家畜商法 制定** 家畜商について免許・営保証金の供託などの制度を実施し、家畜商の業務の健全な運営を図り、それによって家畜商の取引の構成を確保することを目的とする。	「家畜商法」が制定され、家畜市場の近代化を図るための動きがありつつも、農家が市場まで牛馬を運搬するためには経費がかかったため、馬喰との売買であれば庭先や厩舎で交渉が成立すること、売買が成立すると農家も馬喰も即座に現金収入があったことなどから、市場での取引は常態化しなかったようです。 しかし、時代の変化と共に市場も安定していき、「馬喰」ではなく「家畜商」の名が浸透。さらには農業の機械化、牛馬を飼養する農家の高齢化による飼養戸数の減少等の影響から、畜産経営は大規模な経営体へと発展。馬喰が農家を訪問して売買交渉する姿は消えました。

馬喰は、牛馬を飼養する農家へ直接訪問し**「手指法」**を使って売買交渉を行い、その交渉は**「庭先取引」「袖下取引」**と呼ばれます。馬喰特有の取引方法のため、農民などには理解し得ない光景だったのではないでしょうか。

馬喰にインタビュー！ 小崎 幸一郎氏（92歳）

大東町渋民在住。農家に生まれ育ち「生き物が好き」という理由から馬喰の職を突き進んだ。22歳頃から88歳まで牛馬を扱う馬喰として活躍。自身も売買用の牛を飼育していたが、高齢を理由に市場へ全頭売り出した。

Q1 馬喰の仕事とは？牛馬を治療することもしていたのか？

（下線部＝小崎さんが先輩馬喰から聞いた話）戦時中は、「売れる軍馬」か、「売れない軍馬」か見極めをしていた。売れそうなら買い取り、藤沢町（当時）の軍馬購買官で売った。そこで売れたら「目利きがある」という事で有名にもなるし、仕事も増える。売れない場合は農家と農耕馬（牛）を売り買いしていた。戦後は、軍馬としての価値が無くなったため、主に農耕用としての牛馬を取り扱った。家畜市場が出来てから牛馬は市場に出すことが多くなった。今の農家の状況（牛や馬の飼育）は歩いていないのでわからない。馬喰が担当する治療は簡単なことのみで、主に獣医師が行っていた。

Q2 一人前と扱われるのはどのタイミング？

牛馬を見極められるようになること。見極められなければ、馬喰にはなれない。

Q3 1年間でどの時期が忙しい？忙しかったのは何年頃？

春先が忙しかった。昭和30年頃までは忙しかったが、昭和50年頃、市場取引が出来てから仕事は減った。さらに農家で牛馬を預かってくれるところが少なくなり、職として成り立たなくなってきた。

Q4 馬喰になる（名乗る）には、試験または免許、世襲制など条件があったか？

家畜商法が制定されたため、免許が必要となった。一回取得すれば生涯使える。世襲制ではないが、個体を見極める目がないと続けていくことは難しい。

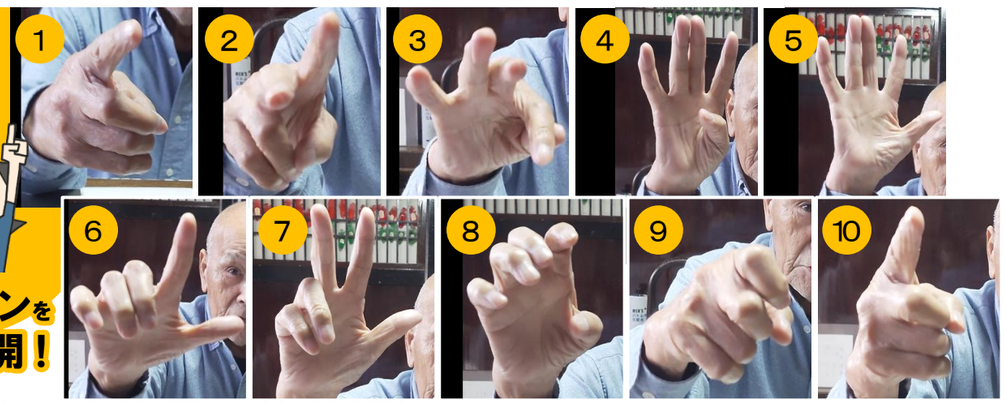
Q5 小崎さんが馬喰として活躍していたとき、馬喰は市内に何人くらいいたか？

大東町渋民にもう1人いて、それ以外は不明だが、多くはないはず。

「はだっこ」という半纏のようなものに腹巻、白い長ぐつが看板衣装！頭はねじり鉢巻きか「烏打帽子＝ハンチング帽」だった。道具は必要ない。

馬喰には共通のハンドサイン（手指法）があり、こたつの中などに手を隠して売買金額を交渉していました。

馬喰のハンドサインを特別に大公開！



※参考文献等は当センターホームページにて記載しています。ご了承ください。